

◎野木京子 3月

前回「すぐれた詩を読むと、感想がいろいろ自然に湧いてきます」と書きました。それは、よい詩を読むとその詩と対話したくなるから、かもしれません。今月も、いくつもの詩と対話できたので、うれしかったです。

冴返る旅立ちの日の母の声

まちりこ（埼玉県）

*卒業式の朝の高揚した気配が伝わりました。最後の制服姿で緊張している子どもの耳に、いつもより凜とした、透き通った母の声が飛び込んできたのでしょうか。無事に卒業できた晴れがましさも感じました。

魂が

肉体離れていく瞬間

モニターの波形が

滑走路となる

加藤 美紀（愛知県）

*モニターの波を不安な気持ちで見詰めたときが、私もありました。波が平板になったとき、悲しくてとても辛かったですが、飛行機のように新しい世界へ飛び立ったのだと受け止めたら、穏やかな気持ちになれる気がします。

夜の隙間に人差し指を引っ掛ける

黒く染まった手に天の川

八雲陽（愛知県）

*星空へと伸びる巨大な手が見える視覚的な詩であり、身体感覚の詩でもありますね。手を伸ばして夜空をつかめるとしたら、どんなに素敵なことだろうとも想像しました。

アルバイト
クビになるたび
神保町

サトリ（東京都）

*この詩は意味がわからなくて、そのわからなさがおもしろかったです。古本を購うと心が落ちつくのか、クビになった悔しさをカレーライスを食べ
て忘れようとするのか、神保町ならではの古い喫茶店へ、深呼吸をするために行くのだろうか、いろいろ想像しました。

明け方の良い川が語りかけてくる

青木雅（埼玉県）

*良い川ってなんだろうと気になって心に残ります。良い川があるなら悪い川もこの世にはあるのだろうか。夜明け近い、心が清澄になる時間に、そ
の瞬間にだけ聞こえるさざ波のような水の声は、なにを語っているのでしょうか。

あのとき
手術で腹を十六針縫った犬を抱え

机の下で震えていた

風船（東京都）

*3月11日に投稿された作品です。あの日から十年が経ち、大きな外科手術を生き延びた犬は、今も元気だろうか。空白の三行目に、犬の体温、長
く続く激しい揺れ、体の震えなどが詰まっているような気がしました。

藤村君を好きだった理由は
忘れてしまって
彼の

少し大きめの耳ばかり思い出す

春町 美月（大阪府）

*耳の大きな藤森君はどんな男の子だろうと気になって、頭から離れません。固有名には喚起力の強さがあります。少年の耳が目の前に浮かぶ、強烈な視覚の詩でもあります。春町さんの詩は、いつも五感を刺激します。

鉄棒ぐるん

回るよぐるん

何度もぐるん

校庭の隅で

僕だけの宇宙

ラキア（東京都）

*冒頭三行の七文字がリズムカル。「ぐるん」という言葉が持つ、回転する身体感覚がうまく出ています。鉄棒が好きな子どもの気持ちがわかった気がしました。

初めての一国一城

バイト代と床のゴミを見て

親を敬う

函芝春弥（北海道）

*生活するためのお金を稼ぐのは、すごく大変なことなんですよね。ゴミをきちんと捨てるのも、けっこう知力と体力が必要です。普通の生活をするとは、日々努力を積み重ねることであることに、親元から離れて初めて気づいたことが、素直に書かれています。

何年も前の光を

届けてくれる星。

不安なことが少しだけ

どーでも良くなる

きやま いと (兵庫県)

*巨大な宇宙に比べたら、ちっぽけな人間社会。光年という、人間などには体験できない、果てしなく長い時間を思うことで、嫌なこと、不安なこと、腹立たしいこと、いろいろなことを乗り越えることができそうです。最終行の「どーでも」の「ー」の部分で、大きく息を吐きだして、心がちょっと軽くなった様子も伝わりました。